

はじめに

不思議なもので、これまで興味がなかったことであっても、ひとたび興味が湧くと、「もつと知りたい」と思わずにはいられなくなります。何にしたって、その世界は奥深い。知的興味は、決して尽きることがないでしょう。

勉強も、それと似ています。解けなかったら、全然楽しくなんかない。ところが、いざ解けるようになる、と、だんだんと楽しくなってくる。とりわけ、現代文という正体不明な科目の正体が見え始めたなら、なおのことです。

もちろん、正体不明とはいっても、現代文の問題を目の前にして、全く歯が立たないという思いを抱く人は少ないでしょう。日常的に使っている母語＝日本語が素材なわけですから、どうにかなりそうという感じは強いはずです。

ところが、現実はいくると、出題される文章のみならず、その解説までもが取りつきにくい日本語で書かれていて、やがてどうにもならなくなってしまう人が出てきてしまう。日本語なのに、その日本語の理解に苦勞する。さらに、問題を解くといったって、その解き方がイマイチわからない。

そうした事態をなんとか打開したいという思いから執筆したのが、前著『はじめての入試現代文 正解へのアプローチ』でした。解き方の手順を「5段階のアプローチ」という形で整理し、その工程に従って解いてい

けば、誰もが無理なく正解に辿りつくことができる。その方法をコンパクトに、そしてわかりやすくまとめたのです。

その結果、「今までは感覚で解いていたけど、一読した上で問題を解いたら、点数が取れるようになりました」「友達に薦めたら、めっちゃ解けるようになって、とても感謝されました」など、数々の嬉しい声をもらいました。どうやら前著によって、現代文学習のとっかかりを得てくれた人が大勢いたようです。

そういった意味で、前著は、既存の参考書とは趣を異にした、画期的な一冊であったと自負しています。

しかしながら、徐々に学習を進めていくうちに、取り組み方のわからない問題や、うまく解けない問題が目の前に現れてきましたね。そう、前著は、現代文学習のとっかかりを得てもらったための一冊でした。そのため、「すべて」は語っていません。

実際、勉強に弾みが付きはじめた一方で、「これはどうしたら良いの?」という疑問があれこれ出てきたことでしょう。たとえば、評論・随想・小説といった各ジャンルの文章の読み方や、様々な設問形式への取り組み方など、まだまだ知りたいことが、いっぱいあるはずです。

そこで、そうした疑問のあれこれに答えるべく、「次の」一冊を！それが本書です。

とはいえ、アブローチの方法の本質的な部分は、何も変わりません。問題文の長さなどの見た目は違っても、考え方の基本は同じです。したがって、前著で学んだ方法をより深化させ、考え方の幅を拡げていくというイメージで本書に取り組んでみてください。

ところで、前著刊行後、予想以上に評価の高かった点がありました。それは、本の「薄さ」です。情報が溢^{あふ}れている時代だからこそ、逆に、必要なことを一気に学べるコンパクトなものが求められていたのかもしれない。「最後まで読み切った参考書は、この本がはじめてです」なんて声もあったほどです。

というわけで、本書も引き続き、その「薄さ」にこだわり、前著で扱わなかった「次の」要点を、一つひとつわかりやすく、しかも、簡潔に説明していきます。

最後に。前著も本書も、書名に「入試」とあります。ですから、ゼロから「現代文という科目そのもの」について学ぶことを目的とした本ではありません。あくまでも「大学入試の現代文問題」へのアプローチの仕方を学んでもらうことが最大の狙いです。

したがって、前著に引き続き、例題の問題は、受験生がぜひ読んでおきたい文章を、出題年の新旧を問わずに厳選しました。さらに、問いのレベルも比較的高めになっています。なぜなら、今は入門者であっても、いずれは難関大学へ進学したいと考えている人も多いと思われるからです。というわけで、本書も、前著同様、すべての「入試」現代文入門者が満足できる一冊を目指しています。

さあ、「次の」ステージへ、新たな地平を切り開きましょう！

二〇一九年一〇月

木村哲也

使用にあたって

本書は、前著「はじめての入試現代文 正解へのアプローチ」を読み終えてくれた人を対象にした「次の」一冊です。万が一、読み終えていない場合は、**前著を必ず読んだ上で本書に入ってください。**

なお、前著で学んだ解き方の「フォーム」は、様々な問題を解いているうちに、少しずつ崩れていってしまうようです。なぜなら、知らず知らずの間に、自己流の解き方に戻ってしまうからです。そこで、解き方を揃えないものにするために、本書と並行して、前著も繰り返し読むことをオススメします。また、前著の中で登場した要点は、本書にもページ番号を記載しました。その都度思い起こし、定着に努めましょう。

さて、現代文の問題というのは、課題文が与えられ、その中身に即した理解が試されています。ということには、ただひたすら、成り行きにまかせて読むのはNG。一貫した「読解法」に基づいて読み進め、本文内容を正確に把握できるようになって、はじめて「一人前」です。

とはいえ、前著は、解き方のとっかかりを得てもらうことが目的でしたから、あえて短めの文章を用いて理解を図りました。しかし、実際の入試となると、ある程度の長さを持つ課題文を読んだ上で、問いを解いていかなければなりません。それゆえ、「次の」ステージに突入する本書は、例題の文章も長くなっています。すると、その分、難しさを感じる人もいることでしょう。でも、現代文を学ぶに際し、文章を読むという作業は避けて通れません。現代文の実力を「**完全体**」に仕上げるべく、本書で読み方もマスターしてください。

さらに、前著は、傍線部説明問題や空所補充問題が中心だったため、それ以外の設問形式への取り組み方については触れられませんでした。また、小説についても、簡略な説明にとどまっています。

というわけで、本書においては、紙幅の許すかぎり、様々な設問形式の処理の仕方や、小説問題・随想問題の解き方についても解説していきます。それによって、「完全体」へより一層近づくことができます。

あらためて強調しておきますが、「完全体」に仕上げるためにもっとも重要なことは、前著と本書を繰り返し読んで、しっかりと「フォーム」を身につけることです。何度も読み直し、解き方と読み方を固めてください。これは、前著を読んで成績を伸ばしてくれた先輩達からの助言です。

ちなみに、単色刷りには賛否両論があると思います。もちろん、カラーや二色刷りの方が強調されている事項がすぐ目に入ってくるし、見た目もきらびやか。前著の読者の一部からは「マジメかつ」というツツコミもありました（笑）。しかし、単色刷りには狙いがあります。著者の側の強調は最小限にとどめている代わりに、学習者それぞれが色ペンを手に持って、自分が「大事だな」と思った所へ主体的にチェックを入れてほしいのです。大事だと思ふ点は、人それぞれ異なるでしょうから、チェックの仕方は十人十色。チェックが入っているということは、それだけ積極的に取り組んだ証（あかし）ですし、そういった人が成績を伸ばしているのも事実です。つまり、どんどん「汚して」いくことが大切です。

それでは、入試現代文への「次の」アプローチを、はじめましょう！

目次

はじめに	2	使用にあたって	6
第1講 「論理的読解」へのアプローチ			
例題1 木も見て森も見よ	14		10
第2講 「背景知識」へのアプローチ			
例題2 無知は罪なり	24		22
第3講 「『難』読解」へのアプローチ			
例題3 あきらめないで！	36		36
第4講 「各設問形式」へのアプローチ			
例題4 「内容一致問題」の落とし穴	44		44
例題5 「脱文挿入問題」の大原則	56		
例題6 「整序問題」と「接続語挿入問題」の着眼点	62		
第5講 「小説問題」へのアプローチ			
例題7 小説☆革命 パターンⅠ	72		70

実践講 ファイナルアプローチ

総合問題 「随想問題」で最終完成！

106

例題8 小説☆革命 バターンⅡ（前編）

76

例題9 小説☆革命 バターンⅡ（後編）

80

例題10 小説☆革命 バターンⅢ

88

●ワンポイントコラム1 ● 勝者のセオリー

126

●ワンポイントコラム2 ● MAKE A LEGEND！ 伝説を作れ！

130

あとがき

134